

News Letter

No.4 2011.1

「木下尚江資料」の展示と、画像データベース公開

「木下尚江資料」の展示

早稲田大学文学学術院所蔵「木下尚江資料」の整理と公開は、研究所の「メディア・書物・注釈プロジェクト」の活動の一つとして、早くから計画・推進されて来ました。2010年2月に研究所が刊行した『早稲田大学文学学術院所蔵 木下尚江資料集』第一集(全96ページ)は、その最初の成果です(ニューズレター No.3 参照)。教文館版『木下尚江全集』に未収録の資料を翻刻したその資料集は、尚江研究者だけでなく、多くの人から注目され歓迎されました。

その資料の実物は、これまで未公開でしたが、その一端を展示し、多くの人に見ていただける機会が生まれました。2010年、文学学術院が文学部創設から数え120周年になるのを記念し、記念行事「FUTURE UNDER CONSTRUCTION」が計画され、その行事の一つの展示「交差する知一文化の構想力」に、その資料の一部を展示してほしいという依頼があったからです。その特別展示(2010・10・11-28、会津八一記念博物館)には、代表的な資料の一部が展示され、展示解説を兼ねたレクチャー(10・16、中島国彦「資料から見る木下尚江」)も開かれました。その概要は、近く文学学術院から刊行される、記念行事の記録集に集約されることになっています。

画像データベースの公開へ

「木下尚江資料」は、整理中であることもあり、今のところ非公開になっています。しかし、デジタル画像として保存し、それを活用することは、10年近く前から計画されて来ました。幸い、すでに『木下尚江全集』第19巻(2003年刊行)と今回の『資料集』のためにスキャンされていたデジタル画像が、かなりの量になります。その画像の公開は、多くの人から待たれたものです。研究所の「メディア・書物・注釈プロジェクト」の活動として、画像データベースの公開は、全世界からのアクセスを可能にし、「重点領域研究」の趣旨からいっても、重要な事業です。

新しい画像データベースは、文学学術院のホームページからアクセスできることが条件となり、おのずとデザインの制約があります。RAの梅田径さんの多大な協力もあり、10月11日の特別展示開始に間に合うよう、早稲田総研と調整し、急ピッチでデータベース構築がなされました。画像の再確認がなされ、一部モノクロでスキャナーされたものを、もう一度カラーでデジタル収録することもなされました。資料にもう一度当たり直し、寸法をチェックし、解題を書きなおすことも、夏休みの仕事でした。こうして、何とか第1次公開分の画像データベースを構築し、期日までに文学学術院のホームページからアクセス出来るようになることが出来ました。資料一覧から、公開されている資料をチェッ



木下尚江資料 画像データベース
<http://www.littera.waseda.ac.jp/kinoshita/index.html>

クし、画像を表示し、必要に応じて拡大して見ることも出来ます。

今回の画像公開分は、『木下尚江全集』第19巻と、『資料集』第一集に翻刻されている資料の全てです。活字に翻刻されている資料が、実際どのような姿であるかが、たちどころに理解出来ることになりました。翻刻は、原則として最終の形を紹介していますので、筆跡、字配り、原稿の直しなどは、実際の画像を見ることで理解出来ます。原稿のまま残された資料については、こうした形での公開がどうしても必要なのです。

現在、次の作業として、『資料集』第二集の編集が進められています(2011年春刊行予定)。昨年新たに撮影されたその画像も、整理が出来次第、画像データベースの第2次公開分として紹介されます。こうした作業はもうしばらく続き、尚江の自筆資料の大部分が、第3次公開までで、紹介されることになるはずですが。

画像データベースの閲覧方法

- ①「早稲田大学」のHPから、「早稲田大学文学学術院」のHPを開いて下さい。
 - ②「研究・教育活動」の部分を開いて下さい。
 - ③右下にある「学術データベース」の部分を開いて下さい。
 - ④「B 学術文献データベース」の最後にある「木下尚江資料画像データベース」の部分を開いて下さい。
 - ⑤トップページの「解説」に使い方が記載されていますので、それを見てご利用下さい。
- * 研究所のHPから、③の「学術データベース」にリンクされています。

(「木下尚江資料」担当 中島国彦)

「多元視野下的中国文学思想」国際学術研討会

アジア・プロジェクト研究分担者 河野貴美子

北京師範大学文芸学研究中心、北京師範大学文學院、北京語言大学国際漢学研究所、そして早稲田大学国際日本文学・文化研究所の共同主催による「多元視野下的中国文学思想」国際学術研討会が、2010年9月24日から26日まで、中国・北京市の遠望楼賓館を会場として行われました。

今回のシンポジウムは、中国教育部人文社会科学重点研究基地である北京師範大学文芸学研究中心が主体となって企画されたものでしたが、早稲田大学とも長年にわたり学術交流のある北京師範大学文學院の張哲俊氏から共同主催への要請があったことから、本研究所アジア・プロジェクトの活動の一環として主催者に加わり参加に至ったものです。シンポジウムの計画にあたっては、2010年3月に文学学術院教授吉原浩人氏が北京へ出張され、当時北京大学に交換研究員として派遣されていた河野も加わって張哲俊氏とともに協議し、また、6月には張哲俊氏に最終打合せのために来日していただくなど、綿密に準備をすすめました（その際の張哲俊氏のご講演については、ニューズレター No.3を参照）。そして、基調講演者として日本から一名が講演を行うこと、日本側参加者と中国の日中比較文学研究者を中心に一つの分科会を編成することを決めました。また、分科会の発表は、あえて時代やジャンルを特定せず、なるべく通時的かつ多角的に日本と中国の文学、思想を見渡すこととし、また特に日本や中国以外の研究者にも参加を願い、「世界的な視野から」日中の文化について議論することを目指して発表者を募りました。その結果、ニュージーランドのローレンス・マルソー氏や韓国の金孝淑氏（2008年文研、博士（文学））らを含む多彩な顔ぶれが集まり、以下にあげる題目からわかる通り発表内容も多岐にわたり、充実した分科会を形成することができました。なお、ニュージーランドからご参加いただいたローレンス・マルソー氏には、北京に向かう途中で東京に立ち寄っていただき、シンポジウム直前の9月22日、早稲田大学にて「見えないものの肖像画集—鳥山石燕の『画図百鬼夜行』管見—」と題する講演を行っていただきました。



シンポジウムプログラム

9月24日（金）北京師範大学京師大廈到着

9月25日（土）

午前9:00-9:45 開幕式 司会：北京師範大学 李春青氏

挨拶 北京師範大学校党副書記 唐偉氏

北京師範大学資深教授 童慶炳氏

北京師範大学文學院院長 張健氏

北京語言大学国際漢学研究所所長 黄卓越氏

早稲田大学文学学術院 高松寿夫氏

午前10:00-12:30 基調講演 司会：王一川氏（北京師範大学）、左東嶺氏（首都師範大学）

・《文心雕龍》“物以情観”説（北京師範大学文學院 童慶炳氏）

・神として祀られる白居易——平安朝文人貴族の精神的基盤——（早稲田大学文学学術院 吉原浩人氏）

・「抒情伝統」論述与中国文学研究——以陳世驥之説為例（香港大埔香港教育学院 陳国球氏）

・唐宋類書“文部”の文体文献学価値（中国社会科学院文学研究所 党聖元氏）

・離散／越界：旅法華裔芸術家之跨文化再現与另類女性創作（輔仁大学比較文学研究所 簡瑛瑛氏、張昶卉氏）

午後14:00-17:15 分科会 司会：吉原浩人氏

・陶淵明と藤原宇合（東京医科歯科大学准教授 土佐朋子氏）

・唐土、高麗と大和——『源氏物語』の異国意識と自国意識（北京大学副教授 丁莉氏）

・奈良時代の詔勅にみる漢籍受容（早稲田大学教授 高松寿夫氏）

・『三教指帰』古注釈書を通してみる空海の文学と思想の継承（早稲田大学准教授 河野貴美子）

午後18:30-20:00 歓迎宴

9月26日（日）

午前9:00-11:45 分科会 司会：高松寿夫氏

・『源氏物語』における「ひとのみかど」と「ひとのくに」（世宗大学非常勤講師 金孝淑氏）

・嵯峨天皇「折楊柳」の訓読（北京師範大学教授 張哲俊氏）

・本地垂迹説における中国典籍の影響——清浄法行經の受容をめぐる——（実践女子大学非常勤講師 鈴木英之氏）

・中世日本文学における『史記』享受の実際に関する一考察——軍記物語と謡曲におけるその変容——（明治学院大学教授 マイケル・ワトソン氏）

・夢の中へ——秋成作品と『列子』（オークランド大学准教授 ローレンス・マルソー氏）

午後14:00-16:15 分科会 司会：河野貴美子

- ・ 謡曲「班女」における扇と「砧」における砧（北京外交学院講師 丁曼氏）
- ・ 英国詩人ブレイクをタオイストと呼んだウェイリー（早稲田大学非常勤講師 緑川真知子氏）

午後 16:15-17:15 総合討論・閉幕式 司会：北京師範大学 李春青氏

挨拶 北京語言大学国際漢学研究所 黄卓越氏
早稲田大学文学学術院 河野貴美子
暨南大学中文系 王学玲氏
安慶師範学院文學院 方錫球氏

午後 18:30-20:00 歓送宴

9月27日（月）

エクスカージョン 明代金山嶺長城、北京市孔子廟、国土監など

本シンポジウムは、我々日本からの参加者以外にも、香港、台湾、シンガポール、アメリカ、スウェーデン、オーストラリアなどからの参加者も含めて、100名あまりが集う盛大なものでした。シンポジウム当日に配布された論文集（上下2冊 630頁）には、合計72篇の論文や発表要旨が掲載されています。上には、全体の開閉幕式、基調講演、および我々の分科会の発表内容のみを掲げましたが、これ以外にも二つの分科会が同時並行で行われました。

シンポジウムの開会に当たり、開幕式では、高松寿夫文学学術院教授が本研究所を代表して挨拶の言葉を述べられました。

続く基調講演では、吉原浩人文学学術院教授が、日本で作成された白居易に関わる文学作品や画像を多数紹介されつつ、平安朝の文人貴族らによって神として祀られていた白居易について講演されました。

そして、午後から一日半にわたって行われた分科会では、上にあげた通り、合計11名による研究発表が行われました。このうち中国側の参加者は、丁莉氏、張哲俊氏、丁曼氏（2010年文研、博士（文学））の3名でしたが、本来中国からはさらに、中国社会科学院副教授呂莉氏（題目「柿本人麻呂と中国文学」）、清華大学教授雋雪艶氏（題目「詩歌の重写、鑑賞と文化越境」）、北京語言大学教授錢婉約氏（題目「内藤湖南の漢詩における思想」）、北京大学副教授劉萍氏（題目「『論語物語』と日本近代文学」）の研究発表が予定されていて、特に錢婉約氏と劉萍氏は論文全文がすでに論文集にも掲載されていました。しかし、それぞれやむを得ない事情が重なり、会場での御発表がかなわなかったのはたいへん残念なことでしたが、今後正式に出版されるシンポジウムの論



（写真はすべて吉原浩人氏 提供）

文集においては、それらも含んで刊行できるよう期待したいと思います。

さて、分科会は、一人あたりの発表20分、質疑応答10分という形で進行しましたが、総じて具体的かつ詳細な資料に基づく精緻な発表であり、貴重な新知見の提示や新資料の発見もあり、発表後の質疑応答はそれぞれたいへん活発に行われました。本分科会には、北京大学歴史学系教授の井上亘氏も通して参加され、多くの助言をいただきました。また本分科会には、張哲俊氏が指導されている北京師範大学文學院比較文学与世界文学研究所の大学院生10数名が熱心に参加してくれました。二日目の午後、すべての研究発表が終了した後、彼ら一人ひとりに分科会を通しての感想を述べてもらいましたが、みな、発表者の研究内容のみならず、研究の方法、研究の姿勢までも鋭く観察していて、海外の研究動向を直接に感じ取ることができるよい機会であったと話してくれました。そして、その彼らの言葉を聞いた我々の方もまた、外国の研究者と一堂に会して直接議論する場を設けることの意義を改めて深く感じた次第でした。なお、本シンポジウムは、全体の開閉幕式や基調講演は中国語によって進行了ましたが、分科会は日本語を共通語とし、事前に発表要旨のみ日中の翻訳文を用意して論文集に掲載しました。

分科会終了後は、再び全員が集まり、総合討論、閉幕式が行われ、河野が日本側参加者を代表して分科会の発表と討論の内容を総括報告しました。

なお、先にも触れたように、本シンポジウムでの発表内容は、まず日本で論文集を出版するべく現在準備を進めているところで（2011年8月刊行予定）。また、中国でも中国語版の論文集の出版が予定されています。

（文学学術院准教授）

国際ワークショップ「記憶の痕跡」の報告

イナルコ・プロジェクト研究分担者 丹尾安典

早稲田大学国際日本文学・文化研究所とINALCO（フランス国立東洋言語文化研究学院）は、2009年に「記憶の痕跡」をテーマとする共同研究を継続的に実施してゆくことを決めた。このプロジェクトの目的は、1945年以降の日本におけるさまざまな記憶表象をインターディシプリナリーな観点から研究することにある。個人的なレベルから共同体レベル、制度的なレベルにまたがる多様な記憶表現の交錯を、複眼的に観察し、分析を加えながら、戦後日本の文化現象の根を形成する記憶の核心をあぶり出してゆくことが主要課題となるが、そのために早稲田とINALCO双方は交互に共同ワークショップを開催し、研究の進展と深化をうながすこととした。その第1回共催ワークショップが、2010年10月16日（土）、本部キャンパス1号館2階「現代政治研究所会議室」で開催された。

「午前の部」（司会・丹尾安典）、「午後の部①」（司会・アンヌ・バヤール-坂井）、「午後の部②」（司会・中島国彦）の3部構成とし、早稲田側の11名、INALCO側の6名、計17名の報告がなされた。発表時間は一人10分程度であったが、短い時間のなかで各報告者はよく要点をまとめながら問題点を抽出してくれた。そののち発表にもとづきながらさまざまな「記憶」のありかたに関する討議がおこなわれたが、フロアの教員・学生からも発言があり、活発で充実したワークショップとなった。今回のワークショップでは、おもに文学や視覚イメージによる記憶のありかたが検討されたが、さらに音と記憶との関連、あるいは身体を媒体とする例えば技術の記憶なども、幅広く考えていく必要があると認識された。それら全体をどのように最終的な「記憶の痕跡」の核心的問題へと煮詰めていくかが今後の大きな課題となってゆくだらう。

今回の報告については、2011年6月末までにそれぞれの発表に基づいた原稿をそろえ、これを10月までに出版することとした。この刊行論文集にもとづき、次回ワークショップの具体的なありかたが検討されることになる。第2回目のワークショップは、2011年12月初旬頃にパリで開催される予定である。

第一回ワークショップの報告者と報告題目は以下のとおり。

午前の部（10：30 - 12：00）

- 1 中島国彦（早稲田大学文学学術院教授：日本文学）
「凝視」と「想起」の間—永井荷風・谷崎潤一郎・志賀直哉の戦中・戦後
Entre regard fixe et souvenir : les années de guerre et d'après-guerre chez Nagai Kafu, Tanizaki Junichiro et Shiga Naoya
- 2 千葉俊二（早稲田大学教育・総合科学学術院教授：日本文学）
記憶装置としての写真・映画—谷崎潤一郎『細雪』と小津安二郎「戸田家の兄妹」
Photographie et cinéma comme dispositif de mémoire: *Bruine de neige* de Tanizaki Junichiro et *Les frères et sœurs* de Toda de Ozu Yasujiro
- 3 アンヌ・バヤール-坂井 Anne Bayard-Sakai (INALCO 日本語文化学部教授：日本文学)
開高健とベトナム—戦争の記憶を作るのか、探るのか
Créer ou explorer une mémoire de guerre - Kaikô Takeshi et le Vietnam
- 4 ミシェル・ド・ボアシユ Michel de Boissieu (INALCO 日本研究科博士課程：日本文学)
大岡昇平の戦争小説における記憶の空白
Les lacunes de la mémoire dans les récits de guerre d'Ooka Shôhei



- 5 ルドヴィック・クラン Ludovic Klein (INALCO 日本研究科博士課程：日本文学)
二つの戦争のエクリチュール：和解と断裂—竹山道雄の『ピルマの豎琴』と大岡昇平の『野火』に基づいて
Deux écritures de la guerre: réconciliation et déchirure dans *La Harpe de Birmanie* de Takeyama Michio et *Les Feux* de Ooka Shôhei

午後の部① (13:30 - 14:50)

- 6 大川内夏樹 (早稲田大学大学院文学研究科博士課程：日本文学)
傷痕軍人と戦争詩—兵士の記憶
Invalides et poèmes de guerre: la mémoire des soldats
- 7 カリーヌ・アルネオド Karine Arneodo (INALCO 日本研究科博士課程：日本文学)
影のない言葉、記憶の身体性—日本の第一次戦後詩の断章的研究
La langue sans ombre, la corporéité de la mémoire: éléments d'une étude sur la poésie des premières années de l'après-guerre au Japon
- 8 塩野加織 (早稲田大学大学院文学研究科博士課程：日本文学)
活字が刻む記憶—〈戦後初〉の表記制度改革と文学者
La mémoire gravée par les caractères d'imprimerie: les littérateurs et la réforme du système d'écriture
- 9 榎原理智 (早稲田大学国際学術院准教授：日本文学)
占領期批評の記憶と忘却—『近代文学』と検閲
Mémoire et oubli dans la critique littéraire sous l'occupation américaine: la revue *Littérature moderne* et la censure
- 10 十重田裕一 (早稲田大学文学学術院教授：日本文学)
文学テキストに刻印された二つの検閲の痕跡—交錯する内務省とGHQのメディア規制
Deux traces de censure dans les textes littéraires: les efforts convergents du Ministère de l'Intérieur et du GHQ pour restreindre l'information
- 11 丹尾安典 (早稲田大学文学学術院教授：美術史)
戦後の天皇イメー지를めぐって
A propos des images d'après-guerre de l'Empereur Hirohito

休憩

午後の部② (15:00 - 16:10)

- 12 三ツ堀広一郎 (東京工業大学外国語研究教育センター准教授：フランス文学)
物質と記憶—保坂和志の小説をめぐって
Matière et mémoire : sur le roman de Hosaka Kazushi
- 13 千葉文夫 (早稲田大学文学学術院教授：フランス文学)
岡本太郎と「場所」の記憶
Okamoto Taro et la mémoire des lieux
- 14 大澤啓 Kei Osawa (INALCO 日本研究科博士課程：美術史)
芸術としての裁判—赤瀬川原平による千円札事件公判記録の芸術的「流用」
Du procès judiciaire en tant qu'art: l'appropriation artistique par Akasegawa Genpei des actes de l'affaire des billets de 1000 yen
- 15 奥間政作 (早稲田大学大学院文学研究科博士課程：美術史)
戦(いくさ)は描かれたか—米軍統治下(アメリカ世)における沖縄戦の記憶
La mémoire de la bataille d'Okinawa sous l'occupation américaine : la guerre a-t-elle été représentée en peinture ?
- 16 河田明久 (千葉工業大学准教授：美術史)
阪急西宮球場の博覧会空間—「支那事变聖戦博」から「アメリカ博」へ
Le stade de Hankyu-Nishinomiya comme espace d'exposition: de l'«*Exposition de l'Incident de Chine*» à l'«*Exposition américaine*»
- 17 ミカエル・リュケン Michael Lucken (INALCO 日本語文化学部教授：美術史)
骨の美学のために
Pour une esthétique des ossements

【討議】 (16:30 - 18:00)

(文学学術院教授)



国際シンポジウム + 研究発表 + 講演集会

「越境する歴史×時代小説——ジャンルの混交、研究のグローバル化」の報告

現代・制度・都市プロジェクト研究分担者 高橋敏夫

重点領域研究「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」の研究拠点＝早稲田大学国際日本文学・文化研究所（「現代・制度・都市プロジェクト」）主催の国際シンポジウム＋研究発表＋講演集会「越境する歴史×時代小説——ジャンルの混交、研究のグローバル化」は、2010年11月13日（土曜日）午前10時から午後5時半まで、早稲田大学文学部第一会議室で開催された。

学生を中心に、研究者、評論家、作家、翻訳家、編集者ほか、のべ150人を超える参加者があり、発表者・講演者の話に熱心に聴きいるとともに活発な質疑応答がなされた。

周知のとおり歴史・時代小説は、1990年代以降、従来にない規模のブームをひきおこしている。これは、1970年前後の司馬遼太郎を主たる担い手とした「歴史小説」ブームや、1950年代後半の五味康祐・柴田錬三郎らの「剣豪小説」ブームなどに比べてもいっそう大きなブームであり、毎月多数の作品が発表、刊行されている。

しかし、このようなブームをまきおこしている歴史・時代小説についての研究は従来、学術的かつ総合的な研究はほとんどなされてこず、故尾崎秀樹を中心とした大衆文学研究会にあつまる在野の研究者と評論家の手にゆだねられてきた。その結果、時代小説について持続的かつ発展的に考察しうる場および組織（例えば「時代小説学会」）が形成されなかった。時代小説作家とその作品

を研究課題にする研究者はきわめて少数にとどまる。

このような研究の現状と対蹠的に、歴史・時代小説にたいする海外での関心はたかまりをみせ、翻訳書も増加している。歴史・時代小説をテーマにした博士論文も多くなっている。作品も研究も確実にグローバル化しているといつてよい。

また、現代文学における歴史・時代小説の位置も大きく変化し、現代文学の特定のジャンルにとどまらず、ミステリーや冒険活劇小説はもとより、SFやファンタジーやホラーともかかわり、作家も歴史・時代小説一筋に増して、ミュージシャン、映画脚本家、マンガ家、アニメ原作者ほかからの転進がめだつようになっている。

こうした研究とジャンルの現状をふまえ、本企画では、内外の研究者の最新の研究報告、他ジャンルから転進した作家の講演、ながらく雑誌編集にたずさわってきた編集者の講演、中国、韓国から第一線の研究者をまじえた司馬遼太郎文学をめぐる国際シンポジウムを三本の柱に、歴史・時代小説研究の意義および問題点をあきらかにしようと試みた。

当日の企画内容は以下のとおりである。

総合司会・高橋敏夫

10時～12時 研究発表と記念講演

- チェ・ヘス（早稲田大学大学院） 広がる帝国、動き出す人々——中里介山『大菩薩峠』から
- 大貫俊彦（早稲田大学大学院） 「三日月」と〈対峙〉する不知庵——明治二四年、ちぬの浦浪六「三日月」の登場に見た「小説」の可能性
- ダニエル・サリバン（スタンフォード大学大学院） 成立期の歴史小説——坪内逍遙と山田美妙の場合
- ジェームス・バーダーマン（早稲田大学） 講演 隆慶一郎『吉原御免状』を翻訳して
- 岩本憲児（日本大学） 講演 時代劇伝説再考・小説と映画の往還

13時～15時 作家・編集者講演「時代小説にしかできないこと／ではできないこと」

- 和田竜（作家）
- 小嵐九八郎（作家）
- 諸田玲子（作家）
- 校條剛（評論家・元「小説新潮」編集長）

15時～17時 国際シンポジウム「外と内からの司馬遼太郎文学の批判的再検討」

- 関立丹（北京語言大学） 司馬遼太郎における乃木希典像をめぐって——『殉死』から『坂の上の雲』へ

国際シンポジウム＋研究発表＋講演集会

越境する歴史×時代小説

ジャンルの混交、研究のグローバル化

日時 2010年11月13日 (土) 10:00～17:30
9:30開場 閉会後に懇親会

場所 早稲田大学戸山キャンパス 33-2号館2階第一会議室

参加費無料 予約不要

早稲田大学国際日本文学・文化研究所主催
重点領域研究「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」

Program
総合司会：高橋敏夫（早稲田大学）

【10時～12時30分】研究発表・記念講演

○研究発表
チェ・ヘス（早稲田大学大学院）
「広がる帝国、動き出す人々——中里介山『大菩薩峠』から」
大貫俊彦（早稲田大学大学院）
「三日月」と〈対峙〉する不知庵
ダニエル・サリバン（スタンフォード大学大学院）
「成立期の歴史小説」

○講演
ジェームス・バーダーマン（早稲田大学）
「隆慶一郎『吉原御免状』を翻訳して」
岩本憲児（日本大学）
「時代劇伝説再考：映画と小説の往還」

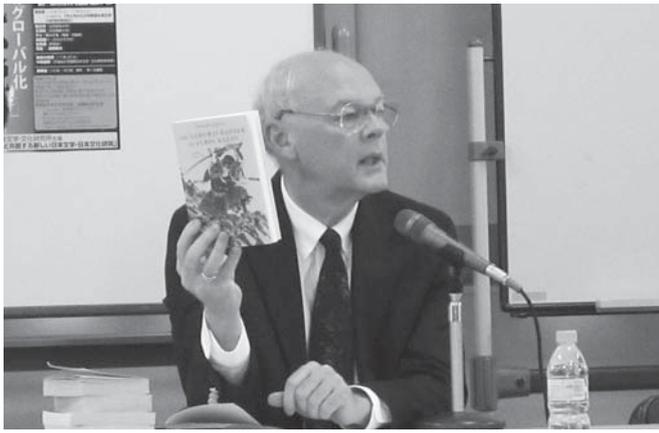
【13時～15時】
作家講演「時代小説にしかできないこと／ではできないこと」
和田竜（作家）
小嵐九八郎（作家）
諸田玲子（作家）
校條剛（評論家）

【15時30分～17時30分】
シンポジウム「外と内からの司馬遼太郎文学の批判的再検討」
関立丹（北京語言大学）
王希典（北京語言大学）
乃木希典（作家）
校條剛（評論家）
高橋敏夫

閉会の挨拶（17時30分）
中橋隆彦（早稲田大学国際日本文学・文化研究所所長）

懇親会（18時～20時）場所：第一会議室

会場アクセス
JR山手線「高田馬場」駅より「早大正門」行バス、
「早稲田下町」下車徒歩2分
東京メトロ東武線「早稲田」駅下車徒歩3分
東京メトロ副都心線「高早稲田」駅下車徒歩12分
【問合せ先】
早稲田大学文学部 高橋敏夫研究室
〒162-8601 新宿区戸山1-24-1
☎03-5288-3713
E-mail: wjlc@lit.cui.com
国際日本文学・文化研究所HP
http://www.lit.cui.com/index.html



○王志松（北京師範大学） 司馬遼太郎論——『項羽と劉邦』と『史記』

○チョ・ヨンイル（韓国・評論家） 司馬遼太郎論

○佐高信（評論家） 司馬遼太郎文学批判

○成田龍一（日本女子大学） 戦後人・司馬遼太郎
司会 高橋敏夫

研究発表では——まず、修士一年のチェ・ヘスさんは、研究対象とする『大菩薩峠』で、今回はそこにえがかれた様々な「民衆」の諸相をとりだし検討を加えた。民衆の自然発生性に依拠した結果、やがてファシズム化していく時代のなかで当の民衆に裏切られていく介山をうかびあがらせたうえで、そこになお残されていた「可能性」について論じた。博士三年の大貫俊彦さんは、村上浪六の「三日月」に対峙する批評家内田不知庵について、従来「三日月」への否定的評価の代表格とみなされてきたことを問い直し、批判したのは「描出」方法であり「人間の心霊」を描くところには小説としての可能性を見出していた点をあきらかにした。スタンフォード大学で博士論文を準備中のダニエル・サリバンさんは、明治期歴史小説成立を四段階に整理し、各段階における中心をそれぞれ、坪内逍遙、山田美妙、読売新聞、塚原洪柿園としたうえで、各段階の意義をまとめた。大きなプランの提示だった。

午前の講演では——隆慶一郎の傑作『吉原御免状』を英語に翻訳したジェームス・バーダーマンさんが、歴史・時代小説の翻訳では、どうしても歴史的背景についての説明が不可欠となり、それが物語のスムーズな展開を阻害してしまう、そこにどんな工夫が必要だったかを、他の豊富な話題とともに語った。映画史研究の岩本憲児さんは、当日体調不良のため急遽、ビデオでの講演となった。時代小説の淵源をめぐる従来の説を列挙し、検討を加えた上で、「剣劇（舞台）、連続活劇、アメリカ剣劇映画、西部劇な

どの趣向とスピード」がかかっていたという自説を映像の紹介とともに語った。

午後の講演では——現役の、しかも大活躍中の作家、和田竜さん、小嵐九八郎さん、諸田玲子さんが登場し、それぞれの作家のファンの学生も多くつめかけた。大学の講義やゼミではまったくといってよいほど取りあげられない（わたしは努めて取りあげるのだが）歴史・時代小説に、若い読者が多くいることをうかがわせた。演劇と映画から時代小説にはいった和田さん、政治運動から現代小説、ノンフィクションを手がけるようになり、時代小説の発表も増えている小嵐さん、そして、向田邦子のドラマ台本のノベライズからはじめ、現代小説も多く書く諸田さん。三者三様の体験をもとに、「時代小説」とは何か、「時代小説でできること、できないこと」について語った。「時代小説も現代小説もおなじ」というのが結論だったが、「権力関係にはらまれる暴力を顕在化しやすい」ところに時代小説の意義のひとつをみいだす小嵐さんの説はとくに印象に残った。また、「小説新潮」の名編集長として多くの作家、作品を世に送りだした校條剛さんから、「時代小説ブーム」がどう仕掛けられたかなどについてのじつに興味深い話が語られた。

国際シンポジウムでは——まず、関立丹さんが、この十年の自身の日本の歴史・時代小説研究をふりかえりつつ、司馬遼太郎の『殉死』における乃木像を検討、『坂の上の雲』に中国人がほとんど登場しないことに疑問を述べた。王志松さんは、1970年代末から現在に至る中国での日本歴史・時代小説の翻訳紹介を詳細にたどり、主として『坂の上の雲』の作者司馬遼太郎への批判を紹介、また、『項羽と劉邦』にたいするネット上の読者の反応なども紹介しつつ、さまざまな角度から検討を加えた。チョ・ヨンイルさんは、韓国では司馬遼太郎の作品の約半分が翻訳されていることをふまえた上で、『坂の上の雲』への批判が多いこ

と、この作品は「国民叙事詩」として日本版『戦争と平和』と位置づけられることなどを大きな視野で論じた。佐高信さんは、すでに『司馬遼太郎と藤沢周平』などでくりかえし展開している観点から司馬遼太郎批判を敢行、とくに日本の悪しき経営者たちの支持を得る作家の無惨について語った。成田龍一さんは、『戦後思想家としての司馬遼太郎』にまとめた「司馬遼太郎の変容」について光をあて、「いくつもの司馬遼太郎」に注意しながら批判および評価する必要性について指摘した。これらの報告

の後、パネラー相互の活発な議論と、会場からの質問およびそれへの応答がなされた。

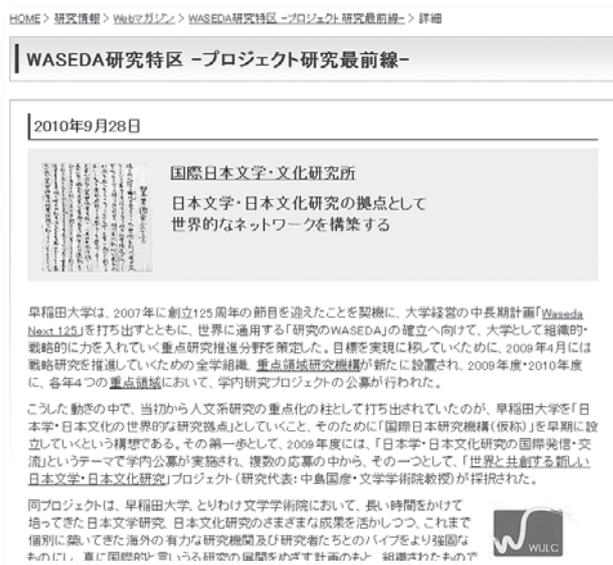
九一日の企画とはいえ、歴史・時代小説をめぐるこれだけの規模の「国際シンポジウム＋研究発表＋講演集会」は、大学および研究機関においては初めての試みといえよう。「現代・制度・都市プロジェクト」では、今後、ここで得られた成果をもとに、別の視点からの歴史・時代小説研究集会を計画したい。

(文学学術院教授)

ニュース

研究所の活動が、「早稲田大学研究ポータル」の「WASEDA 研究特区—プロジェクト研究最前線」に紹介されました

2010年9月28日付けで、国際日本文学・文化研究所の活動が、「重点領域研究機構」の研究所として最初に、大学のホームページの「WASEDA 研究特区」に紹介されました。「日本文学・日本文化研究の拠点として世界的なネットワークを構築する」という見出しのもと、所長へのインタビューを盛り込みながら、これまでの活動、将来への展望が、担当記者の文章としてまとめられています。その概要は、英語でも読めるようになっています。現在でも、大学ホームページの「研究活動」の部分から、「WASEDA 研究特区」のバックナンバーとして閲覧可能ですので、ご覧いただけたら幸いです。



研究所の活動が、「2010 年度早稲田大学研究院フォーラム」で報告されました

2010年10月11日(月・祝)に国際会議場で開催された「2010 年度早稲田大学研究院フォーラム」は、大学の研究活動の現状をアピールする重要なイベントです。その中で、「重点領域研究」の代表の一つとして、中島国彦所長から研究所のこれまでの歩みと成果、今後の展望などをめぐって約20分間の報告がありました。地道な研究所の活動を多くの人に知ってもらう機会として、有意義な機会であったと言えます。白井総長をはじめ、学内外の多数の参加者がありました。

活動予定

1月25日(火)～28日(金)

韓国慶熙大学校日本語科 日本研修(第2回)
講師 竹本幹夫・兼築信行・中島国彦・高橋敏夫

4月19日(火) 10:40～12:10 第5会議室

ミュンヘン大学アジア研究部日本センター
エベリン・シュルツ教授 講演会
(早稲田大学比較文学研究室と共催)

重点領域研究「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」 News Letter 第4号

2011年1月31日発行

編集: 庄司敏子・塩野加織(RA) 印刷所: 三美印刷

発行所: 〒162-8233 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学文学学術院内

早稲田大学国際日本文学・文化研究所(WIJLC) (所長・中島国彦)